Peshawar-kai

ペシャワール会報

No.144
2020年8月5日

ペシャワール会事務局
〒810-0003　福岡市中央区春吉
1-16-8 VEGA 天神南601号
TEL　092（731）2372
FAX　092（731）2373

〈URL〉http://www.peshawar-pms.com　〈E-mail〉peshawar@kkh.biglobe.ne.jp

［写真］タルブザァ（スイカ）とひまわり

中村哲先生が歩んだ道を私たちも歩む　2019年度現地事業報告	村上　優
2019年度会計報告	ペシャワール会事務局
新型コロナウイルスによる更なる困難の中で	ジア ウルラフマン
ドクターサーブ中村の意志を継いで生きていきます	ハッジ デラワルハーン
忘れがたい思い出――空爆下の食糧配給	グラム サヒ
◎**中村哲医師を偲んで**　日常の平和の大切さを行動で示された中村先生	佐藤耕造
朝倉市とアフガニスタンの懸け橋・中村哲医師（下）	徳永哲也
【中村哲医師講演】沙漠を緑に――川崎市での講演から②	
【カラー特集】PMS現地事業の近況――コロナ禍のアフガニスタン	
【カラー連載】マルワリード用水路を行く⑥　H地区（4,776～7,187m 地点）	

ペシャワール会は、1983年9月、中村哲医師のパキスタンでの医療活動を支援する目的で結成されました。彼の活動を支援するとともに、アジアの人々への理解を深めていきたいと願っています。

ホームページはこちらから▶

自然と人、人と人の和解を

「自然から遊離するバベルの塔は倒れる。人も自然の一部である。それは人間内部にもあって生命の営みを律する厳然たる摂理であり、恵みである。科学や経済、医学や農業、あらゆる人の営みが、自然と人、人と人の和解を探る以外、我々が生き延びる道はないであろう。それがまっとうな文明だと信じている」

——中村 哲（『天、共に在り』より）

中村哲医師が歩んだ道を私たちも歩む

2019年度現地事業報告

PMS（ピース・ジャパン・メディカルサービス）総院長／ペシャワール会会長　村上 優

二〇一九年十二月四日、中村哲先生が何者かの凶弾に倒れ、ドライバーのザイヌッラーさんと護衛四名の方々も共に亡くなりました。「中村先生のいない現地事業報告はない」と強く思いますが、先生の志を胸に、アフガニスタン現地のPMS、多くのアフガン国民、それを支えるペシャワール会の二万人を超える会員や支援者、さらにはこの事件を機に中村先生の存在を知った国内外の多くの人々に支えられて、「中村先生の事業は全て継続し、希望は引き継ぐ」を合言葉に今日まで来ました。

前年度の報告の末尾に中村先生は次のように述べられています。「現地赴任から三五年が経ち、いまだに事業が進められていることに不思議な気がします。（中略）医療から始まり、大干ばつで灌漑（かんがい）・農業に力を注ぎ、そして今、温暖化による沙漠化と対峙して河川からの取水技術に集中しています。しかし追いかけ続けてきたものは変わりません」と。では、先生は何を追いかけ続けておられたのでしょうか。

当初から「一隅（いちぐう）を照らす」と表現されていましたが、難病や貧困にあえぐ人々の場に居続けて光を灯し、人々の命と生活を支援してこられました。「目の前に困った人がいれば手を差し伸べる。それは普通のことです」という行動力と思索は、私たちにとって揺るぎない羅針盤です。

中村先生が一九八四年の現地赴任から追いかけ続けてきたもの、その道を私達も歩みます。

2019年度の概要

新型コロナウイルスとPMS

中村先生が亡くなった昨年十二月初め、新型コロナウイルスが世界に広がり始めました。PMSの再出発もコロナウイルス拡大の影響を強く受けてきました。今年一月

二五日のお別れの会は五千人を超える人々に集まっていただきました。この頃、新型コロナが中国では猖獗をきわめ、日本でも感染が始まって不安が広がってきました。現地ＰＭＳと日本のＰＭＳ支援室が事件後インドのデリーで初めて会合した二月一〇日から一五日を境に、インドも日本からの渡航禁止措置を取りました。三月からの日本はご存知の通りです。アフガニスタンもイランとパキスタンを経て感染が広がり、公式の数字以上に感染が広がって、カブールやジャララバードでは都市封鎖されました。

マルワリード取水門に立つ中村医師と村上医師（2004年4月19日）

日本でもアフガニスタンでも活動は大きく制約を受けましたが、中村先生の築かれた事業は止まることなく現場の作業は継続していました。コロナウイルスの感染の一波は過ぎても二波が必ずきます。しかし、これまで行なってきたように、その地域での状況を注意深く判断して、ルールを守り安全に配慮して事業の前進を図ることにつきます。

「安定灌漑」の重要性の認識

アフガニスタンでは一六年から三年連続して少雨が重なり、全土が更なる渇水と干ばつに見舞われ、大量の国内難民が発生し、灌漑への関心が高まった。クナール河でのＰＭＳの実績が大きく評価され、ガニ大統領がＰＭＳ灌漑方式を称賛した。これまで戦火に明け暮れ干ばつを無視してきたが、人々の安定した生活、平和への動きが活発化していることとも関連する。

ＰＭＳ方式で心掛けたこととして中村先生は以下を挙げている。⑴なるべく単純な機器で対処できること、⑵多大なコストをかけないこと、⑶ある程度の知識があれば地域の誰でも施工できること、⑷手近な素材を使い、地域にないものをできるだけ持ち込まないこと、⑸壊れても地域の人で修復できること、⑹水はごまかせない、水のように正直であること。

地球温暖化は急速に、容赦なく、大干ばつだけでなく、時に大規模な洪水も引き起こし、荒々しい気候変動となって現れる。すでに起きている地球温暖化による危険を背負って、「安定灌漑」を全域に普及すべき時期に来ている。

年度事業のあらまし

第一期工事をＪＩＣＡ（国際協力機構）共同事業として始めたマルワリードⅡ堰建設は、後半の第二期をペシャワール会独自の事業として年内の完工を目指して進められている。下流域では住民による耕地回復、新開地が急速に拡がり、小麦やスイカなどの初収穫が行われている。

ＦＡＯ（国連食糧農業機関）との関連事業のミラーン訓練所が軌道に乗り、昨年は二四〇名が研修を受けた。マルワリードⅡ堰の建設現場はカマ堰と共に、生きた教材として研修生たちに希望をもたらした。干ばつが進行するなか、ＰＭＳの灌漑事業では取水技術が確立し、普及事業に向け大きな歩みとなった。現行及び今後の堰の建設計画そのものが普及事業ともなる。

1．医療事業

今年三月以降、行政から新型コロナ感染対策で勤務体制について丁寧で細やかな通達があり、灌漑、農業事業に携わる職員が

自宅待機を要請されるなか、医療事業は通常通りであった。地域で重きをなしてきたダラエヌール診療所では、診療を待つ時間を利用して男女それぞれの待合室で手洗い指導やマスク着用、咳をする時の指導等が根気強く行われている。二〇一九年度の診療内容は表1の通り。

表1　2019年度 診療数及び検査件数

国名	アフガニスタン
地域名	ナンガラハル州
施設名	ダラエヌール診療所
外来患者総数	**41,837**
【内訳】　一般	32,593
ハンセン病	0
てんかん	914
結核	179
マラリア	4,113
外傷治療総数	4,038
入院患者総数	—
検査総数	**10,364**
【内訳】　血液一般	1,409
尿	1,517
便	2,173
ハンセン病塗沫検査	0
抗酸性桿菌	169
マラリア	4,085
リーシュマニア	565
その他	446

2. 灌漑事業

主な工事は以下の通り。

1. カチャラ堰流域（マルワリードⅡ）・第二期工事

本地域はミラーン堰対岸の上流にあり、四年間の工期で二〇一六年十月に着工し今冬の竣工予定で進められている。着工後の急速な治安悪化による工事の一時中断が危惧され、またパキスタンからの大量帰還難民の早期帰農を促すため、流域への早期送水を目指した。二〇一八年夏には目的の四ヵ村へくまなく水を送れるようになり農地が拡大していった。以降、排水路の整備（排水路1＝二七三六mが終了し、現在、排水路4＝全長三五〇〇mを造設中）、護岸工事、交通路の整備、植樹が続けられている。排水路整備により給水と排水を分離した事で湿地帯が農地に回復しつつあり、今年度カチャラ村では第4分水門が建設された。また、川沿いに長く広がるカチャラ堰流域では洪水対策＝護岸工事が重要で、基礎工事は護岸線の最終地点まで到達している。同地では耕作地が急速に拡大し、主幹水路から接続している既存の用水路の整備が必要となり、現在、ベラ用水路の延長工事に取り組んでいる。

2. マルワリード堰改修計画

本計画は以下の通り。

①取水門の拡張と堰の改修（コンクリート製土砂吐きの設置）

②取水口からブディアライまでの約一三kmの用水路床面ライニング（覆工）

③洪水の通過部（涸れ川）の改修

④用水路土手のかさ上げ他

二〇一九年末に着工予定だった取水門の拡張と堰の改修は、中村哲医師の逝去を受け今冬へ延期された。②の用水路床のライニングは取水口から一・五kmまで終了している。

また、③の洪水の通過部（マルワリード用水路を横切る洪水路）の改修工事が行われた。バルカンレイ村を通過する用水路E区（三・四km地点）の洪水路では、幅一五mの橋を三〇m以上に拡幅する計画だった。しかし両岸の住民からの土地収用が困難であったため、橋の両端を一・五mずつ拡張し一八m幅となった。ジャリババ渓谷からの洪水通過路は用水路七〇〇m地点にあり、二〇一一年に一四mから三六mへ拡幅され良く

新型コロナウイルスの影響で物価が高騰する中、PMS職員が健康で働けることを第一と考え、PMS農場で今年収穫された小麦と蜂蜜は職員に配給された（2020年6月10日）

機能している。今回はその周辺の整備が行われた。

3．ガンベリ排水路網の完成（シギ分岐）

ガンベリ開拓は湿地処理が必須であり排水路網の完備が急がれた。主幹排水路工事（一・七㎞）は二〇一七年に既に完工しており、残るガンベリ下流域に約一・九㎞の排水路（シギ分岐）が二〇一九年に着工された。周辺村との調整に時間がかかって本格的な着工が遅れ、更に現場は砂丘が連続し見通しがきかない土地で、かつ著しい軟弱地盤が多い難工事だったが、予定通り昨年十一月に完成した。これでマルワリード用水路の全流域の給水・排水が完全に分離され、湿地や湿害地からの回復、耕地化が期待される。

4．カマ堰改修

二〇一九年二月に完了したカマ第一堰では昨年七月の洪水で右岸の浸食、激流が下る対岸ベスード側からの交通路（橋）と砂州先端部が連続する場所の洗掘が発生した。今後五年間はカマ住民と補修をしていく。

5．灌漑事業の「普及計画」

ミラーン堰の施設を中心に二〇一八年からアフガン東部の農民指導層、政府関係技術者を中心に進められ、二〇一九年はタハール、バグラン州など各州からの研修生が参加し、現場での実地訓練を含む研修が開始された。素掘りかコンクリート・ライニングしか習わなかった技官たちは、PMSの「用水路の構造と作り方」を実際に現場で体験実習し、好評であった。

3．農業事業・ガンベリ沙漠開拓

1．PMSガンベリ農場

二〇〇九年、用水路の最終地点のガンベリ沙漠に横断水路を開通し、同時に沙漠に農場を拓き、PMSの自給態勢を整えた。一六年二月、アフガン政府と協約、開墾地二三五haをPMS農地として半永久的に借用する契約が成立。契約は二〇年毎に更新され、PMSの活動が続く限り継続される。排水路が整った現在、安心して開墾が進められている。

主食の小麦や水稲栽培をはじめ、サトウキビ、旬の野菜など多種の栽培が試みられている。今年は例年になく長雨で小麦に「さび病」が発生し昨年より収穫量が減少した。

二〇一九年度の最大の試みは、養蜂事業で、四月二四日にガンベリ農場で養蜂所開所式が行われた。質の良い蜂蜜三〇〇kgの初収穫があり、今後の増産を見こして巣箱を更に増やした。今年はビエラ二千本からの集蜜も期待され、将来の主要な出荷品目に加えられる。

表2　植樹総数（2003年3月から2020年3月まで）

種類	場所	2003～07年	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年	2019年	2020年（～3月）	合計
ヤナギ	用水路の両岸、河川工事	116,050	55,380	97,380	60,750	73,315	23,650	37,073	18,400	39,650	14,700	30,250	51,750	61,780	19,850	699,978
クワ	用水路土手	7,000	2,750	8,578	4,430	140	292	0	0	0	0	0	0	0	0	23,190
オリーブ	用水路土手、オリーブ園	2,000	0	840	0	0	0	1,424	1,275	240	136	0	5	0	0	5,920
ユーカリ	砂防林、護岸樹林帯	2,500	1,000	11,478	39,584	22,350	28,196	7,150	7,500	2,611	500	4,659	2,010	2,610	6,905	139,053
ビエラ	ガンベリ沙漠	0	300	600	1,165	165	2,083	175	75	0	0	0	0	0	0	4,563
ガズ	砂防林	0	15,100	71,300	14,356	9,887	22,317	3,573	780	265	0	0	0	2,000	0	139,578
シーシャム	護岸樹林帯	0	0	0	0	0	0	4,614	1,400	2,000	6,270	516	660	2,350	6,000	23,810
ポプラ	ガンベリ沙漠	0	0	0	4,900	10,786	1,850	0	220	0	0	0	0	0	0	17,756
イトスギ	モスク、学校、公園	0	0	0	60	195	300	0	0	0	110	0	200	130	193	1,188
果樹	ガンベリ果樹園	600	0	0	193	0	6,034	5,283	9,185	1,458	1,822	4,348	4,884	509	405	34,721
その他		0	0	0	132	190	412	144	50	26	0	1096	597	337	128	3,112
		128,150	**74,530**	**190,176**	**125,570**	**117,028**	**85,134**	**59,436**	**38,885**	**46,250**	**23,538**	**40,869**	**60,106**	**69,716**	**33,481**	**1,092,869**

また、移植後二～五年を経た柑橘類二万五千本の手入れに力を注ぎ、農業事業の責任者が日本で剪定法を実地研修した。オレンジやリンブー（小ぶりのレモン）が数年前から出荷できるようになった。

2. 畜産

二〇一四年に子牛三頭、乳牛二頭から始まった畜産は、現在四七頭になった。毎日原乳を一〇〇～一二五kg供給している。農場では飼育場も広く牧草地も確保されている。

3. 植樹

一九年一月から十二月の植樹数は六万九七一六本。二〇年三月までの累計で、二〇〇三年以来の総植樹数は一〇九万二八六九本となった。用水路や護岸工事に使われる柳、ユーカリ、シーシャムの植樹が圧倒的に多いが、他には柑橘類、イチジクなどが植えられている。内訳は表2の通り。

農業事業では、PMSの農業経営に向けて穀類、果樹、養蜂、畜産が主力となり、自活の道につながることが期待されている。

4. 現地との交流・その他

邦人の渡航が難しい状態が続いている。二〇一七年からジア副院長一行を日本へ迎え交流の機会を持つようになり、一八年に引き続き九月にジア副院長、ディダール技師、ファヒーム技師、アジュマル農業技師が来日し交流を深めた。

ファヒーム技師は測量や作図研修も兼ねての来日であり、引き続きテクノ社の方々から指導を頂いた。アジュマル技師は徳永哲也氏（山田堰土地改良区前理事長）の尽力と福岡県農業試験場の協力で、柑橘類の剪定方法を学び、今年はガンベリ農場で剪定にとり組んだ。また、来日した職員全員が朝倉市の藤井養蜂場で二年目の講習を受ける事が出来た。

新ベラ用水路延長工事。気温が40度を超える中、50人ほどの作業員が懸命に働いている（2020年7月2日）

表3　堰の建設及び改修の経過と予定

施工・実施期間　維持管理期間

堰の名称	（場所）	用水路長（km）		'03～'10	'11	'12	'13	'14	'15	'16	'17	'18	'19	'20
マルワリード堰	クナール州ジャリババ	27	2020年砂吐設置予定	堰造成					沈砂池改修	主幹排水路建設	取水門改修	再ライニング約1.5km	排水路シギ分岐	堰改修
シェイワ堰	シェイワ郡カンレイ村	0.5	河道変遷	堰造成										
カマ第一堰	カマ郡・上流域	0.35	安定	堰造成								堰改修	堰修復、対岸護岸一部補修	
カマ第二堰	カマ郡・下流域	1.05	安定		堰造成						堰改修			
カシマバード堰	ベスード郡カシマバード村	0.25	安定			堰造成								
タプー堰	ベスード郡タプー	0.7				堰造成				廃止、ミラーン堰に統合				
カシコート堰	シェイワ郡カシコート村	2.5	マルワリードと連続				堰造成						上流既存堰、護岸一部補修	堰改修予定
ミラーン堰	ベスード郡ミラーン村	0.3	750m上流で河道整備					堰造成					護岸一部補修	
シギ堰	シェイワ郡シギ村	0.35	河道変遷					堰造成						改修予定
カチャラ堰	シェイワ郡カチャラ村	5.5	安定							堰造成	全域送水	排水路網と植樹、護岸造成		完工予定
ゴレーク堰	シェイワ郡ゴレーク村		21年度建設予定										測量	測量、堰建設予定
ミラーン訓練所（FAO共同事業）										訓練所建設		PMS方式訓練	訓練・候補地調査	候補地調査
JICA共同事業					カマ堰・カシマバード堰ベスード護岸		カシコート堰		ミラーン堰		カチャラ堰		共同調査・ガイドライン作成	

※2019年度から4年間のマルワリード堰改修計画は工事を延期、2020年度から再開。
※シギ、シェイワ堰については河道移動を観察、将来必要ならマルワリード堰流域に統合。
※カチャラ堰（マルワリードⅡ）は2016年10月から2018年9月までJICA共同事業。2018年10月からペシャワール会単独資金による事業。
※ミラーン付近河道整備：ミラーン堰河道の流れを安定させるため、河道固定堰の建設を検討。

十二月四日の中村哲医師の訃報を受け、ジア副院長とディダール技師の二名は先生のご遺体に付き添い来日。その前にPMSの各事業の主なメンバー一二名が意志を確認しあい、皆が一致し運営委員会（現ドクター・ナカムラコミッティー）を結成していた。今年二月にドクター・ナカムラコミッティーからビザ取得が間に合ったメンバー八名と、中村医師の後を引き継いだ新PMS総院長村上優およびPMS支援室メンバーがインドで今後の事業について協議した。これまで日本側へ現地の実情を伝えていた中村医師亡きあと、更に現地との交流が求められる。

◎その他

四月、今年初めての洪水が発生した。直前の二、三月にPMSが造ってきた護岸線はじめ石出し水制一つ一つの確認を促していた。これまで中村医師が現場の技師や運転手と常時行なってきたことで、数ヵ所補強の必要があったが、洪水前に終えることができた。

また、コロナウイルス感染対策で自宅待機命令のさなか、マルワリード用水路FG地区で用水路床面が陥没。見廻り体制が行き届いており発見者からジャラバード事務所へ連絡、技師の派遣、重機や燃料の手配と驚くほどスムースに修復工事が進められた。ジャラバード市内の事務所から現場への道路は封鎖されている中での工事だったが、職員たちによる粘り強い行政への事業進行の申請と資機材の輸送の工夫により難局を乗り切った。皆が一致して前に進もうとする姿勢が伝わってきた。

2020年度の計画

二〇一九年度の連続である（表3）。

①カチャラ堰流域は、護岸八・五kmの建設を八・九kmに延長、排水路の整備を続行、ベラ用水路延長工事、②マルワリード用水路は取水堰と取水門の改修、用水路床面の再ライニング、③ゴレーク地区及びシギ堰周辺の調査が予定されている。取水設備の普及のための研修は、PMSの体制が整うのを待ち、現在JICAとの共同事業であるガイドライン完成後に、実地研修が再開される予定である。ラグマン州の灌漑計画は

今年も田植えの時期が来た。ここがかつて死の谷と呼ばれた沙漠だったとは……
（2020年7月7日）

カブール河の汚染が酷いため中止となった。

二〇一七年に打ち出された二〇年継続態勢は、既設のＰＭＳ水利施設の維持、隣接地域へのＰＭＳ取水方式の普及が目的であり、将来を見据え、今年採用した若年層の技師二名の訓練を続行し長期に備える。

ガンベリ農場では、養蜂、畜産事業が拡充される予定であり人材の育成が必要となる。引き続き細野道明氏（ＣＴＩＩ）の指導を頂き栽培計画の見直し等を進める。

医療事業は、ダラエヌール一帯のみならず重きをなしており、設備拡充の必要性が出てきている。他事業と同様に人材育成が今後の重要な課題である。

2019年度を振り返って

以下は中村哲医師が昨年度のまとめとして書いた文章である。すでにこの時に自身の赴任時から現事業までの経緯を簡素にまとめ、三五年間を振り返っておられる。ここに再度掲載し、共に振り返ってみたい

無事に一年が過ぎました。現地赴任から三五年が経ち、いまだに事業が進められていることに不思議な気がしています。

正確には一九八四年ペシャワール赴任、八八年のソ連軍撤退開始と同時にアフガン東部の山岳地帯へ活動を広げ、二〇〇〇年の大干ばつに遭遇、その惨状に医療の無力を骨身に覚え、診療所周辺の村落救済に奔走、飲料水確保で井戸の掘削、次いで灌漑による農業復興、大河クナールからの取水、暴れ川と対峙するうちに年月が経ち、気づいたらお爺さん――という訳です。この間、二〇〇一年にアフガン空爆、米軍の進駐、そして撤退開始、振り返れば慌ただしいことです。

日本でもバブルとやらが膨らんでは消え、失われた二〇年などと言い、右往左往するうちに昭和→平成→令和と時代がかわり、慌ただしくなりました。しかし、通信・交通の便だけ、悪いことも沢山、速やかに起きるようになりました。

現地事業はまるでこのような世相を無視するように、続けられています。医療から始まり、大干ばつで灌漑・農業に力を注ぎ、そして今、温暖化による沙漠化と対峙して河川からの取水技術に集中しています。しかし、追いかけ続けてきたものは変わりません。むしろ、ここでは必然の成り行きだったと思われます。

更に竿頭一歩を進め、この事業の恩恵を拡大すると共に、私たちの軌跡が人々を励まし、神意に適うものである事を祈ります。併せて、これまでの温かいご関心とご協力に感謝致します。

中村　哲

中村先生に代わって現地事業を振り返る役割を果たそうとすればするほど、あまりにも失った人の大きさに圧倒される。状況をみる炯眼、この地域から世界を見る思想、判断し展開する実行力、そしてそれを伝える言葉の力。皆さま、ＰＭＳの事業とそれを支援する活動に力をお与えください。

2019年度の主な収支

’19年度会計報告

期間　2019年4月～2020年3月

一般会計（単位：円）

［収入の部］

1	会費・寄付	455,720,598 ①
2	補助金等	0
3	利息雑収入	4,211,510 ②
4	収益事業収入	3,593,178 ③
5	基金より繰入	0
	年度収入計	463,525,286
	前年度繰越	52,094,677
	収　入　計	515,619,963

［支出の部］

1	現地協力費	123,742,606
	PMS運営協力費	18,534,561
	アフガン事業費	90,455,541 ④
	現地支援資材費、通信費	3,961,534
	渡航費	9,099,169
	国内活動費	1,691,801
2	広報費	14,620,690 ⑤
3	事務局費	27,081,859
	年度支出計	165,445,155
	基金への繰入	300,000,000
	次年度繰越	50,174,808
	支　出　計	515,619,963

①会員・支援者からの会費、寄付金（個人22483件／団体853件）
②利息、前期分費用の入金
③収益事業会計から
④灌漑用水路建設等
⑤会報印刷・送料等

収益事業会計

［収入の部］	
書籍売上	11,257,455
DVD売上	3,711,392
雑収入	763,348
売上収入計	15,732,195
［経費の部］	
書籍等原価	10,297,522
販売費	709,595
事業所税等	1,131,900
経費合計	12,139,017
収益事業収入	3,593,178

「いのちの基金」残高

期首残高	740,000,000
一般会計に繰入	300,000,000
期末残高	1,040,000,000

監　査　報　告　書

2019年度ペシャワール会会計については適正に会計処理がなされているものと認めます。

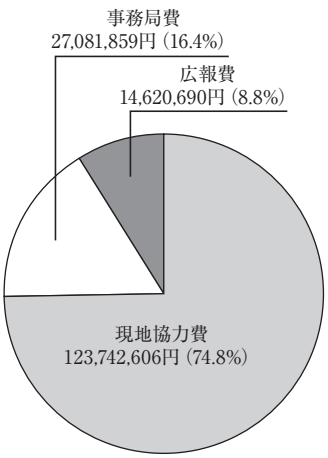
2020年6月3日　ペシャワール会　監事

未使用切手、書き損じ葉書の寄付

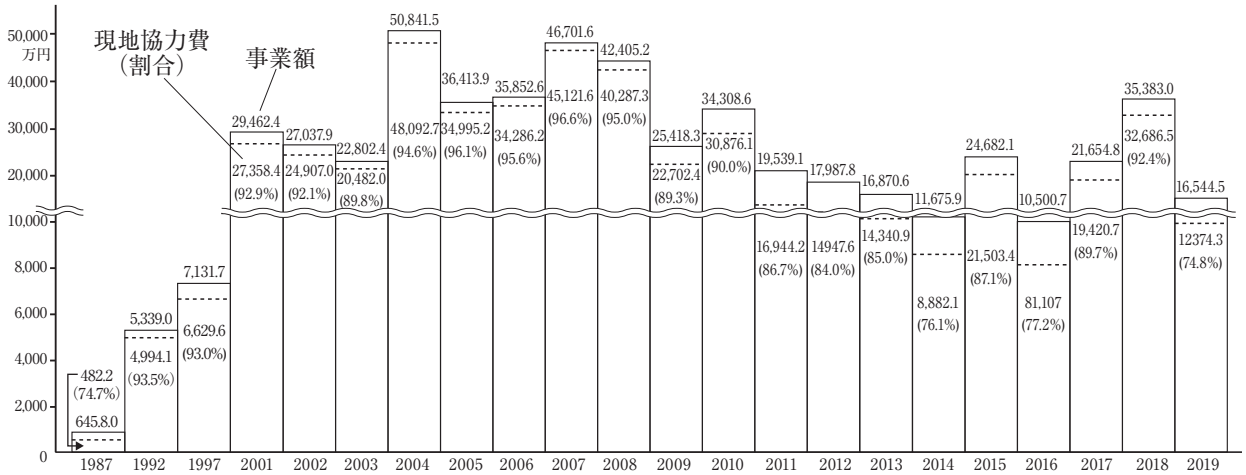
寄付いただいた件数	788件
未使用切手枚数	81,930枚
同　金額	4,140,049円相当
書き損じ葉書枚数	25,717枚
同　金額	1,277,111円相当
合計金額	5,417,160円相当

＊会報発送費用に活用しています。

●2019年度事業額（支出ベース）
165,445,155円



事業規模（会費・寄付件数、事業額）の推移　1987～2019年度



	1987	1992	1997	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019
個人件数	519	2,202	2,968	59,478	21,167	18,079	15,119	18,449	19,027	19,248	22,343	20,432	21,238	18,301	18,639	17,489	17,854	17,449	16,849	16,744	15,815	22,483
団体件数	38	114	221	689	1,730	1,275	953	932	903	910	990	851	956	719	702	657	675	634	603	587	537	853

新型コロナウイルスによる更なる困難の中で

PMS副院長／ジャララバード事務所所長　ジア ウルラフマン

事業を再開、仕事に励んでいます

ドクターサーブ中村が亡くなられた後、村上新PMS総院長たちと協議するため、今年二月十日、インドで会議を持ちました。

会議最終日、「ドクターサーブ中村学校」の生徒だった私たちは、中村先生は物理的には亡くなってしまわれましたが、先生の想いはPMS職員の中に今も生きており、これから一つのチームとしてドクターサーブのやり方を踏襲し、先生の願いを実現して行くと約束しました。そして最後に参加者一同、手を重ね合わせてドクターサーブ中村のやり方に誠実に従って行くことを誓いました。

会議を終えてアフガニスタンに帰国した数週間後、アフガン政府がCOVID―19（新型コロナウイルス）対策のため一ヵ月間の都市封鎖を行うと発表しました。ベスードの橋も封鎖されてしまったため用水路の建設資材を現場に運ぶことが出来ず、私たちは業務を十五日間程停止せざるを得ませんでした。その後、政府の許可を得て事業を再開し、職員たちは現在まで一生懸命に仕事に励んでいます。

これまでのところマルワリードⅡ事業同様、医療、農業、他の用水路の修復工事等は殆ど問題なく進んでいます。

深刻な物資不足

ご承知の通りCOVID―19の影響は世界中に広がっており、アフガニスタンは既に治安や経済問題で苦しんでいたところにコロナウイルスに追い打ちをかけられ、大変困難な状況に陥っています。近隣国との国境も閉鎖されているため、医薬品その他様々な物資が不足してきています。

アフガニスタン国内で登録されたCOVID―19感染者は二万四一〇二人、うちナンガラハル州の感染者数は一二四六人、死者は二九人（六月中旬）と発表されています。しかしアフガニスタンでは検査機能が十分でないため、この数字は正確とは言えません。きちんとした検査施設があれば、これらの数字はもっと増えるものと思われます。感染したと思われるPMSの職員一九名と周囲の多くの患者を診（み）ると、アフガニスタンの感染者は他の国に比べて重症化のリスクが低いのではないかと感じています。しかし前述のような理由、即ち治安や経済の問題にCOVID―19のパンデミックが加わったため、アフガニスタンでは貧しい人々は更に貧困に陥り、食べる物も薬もなく、病気になっても行く病院がないという状況です。

アフガン東部のナンガラハル、クナール、ラグマン、ヌーリスタンの四州には、COVID―19の検査ができるラボは一ヵ所しかありません。感染患者を収容できる医療機関も一ヵ所のみで、しかもそこには酸素吸入器どころか消毒液の噴霧器さえありません。

このように、アフガンの貧しい人々は幾重にも重なる困難と闘っています。そんな状

（15頁につづく）

ロックダウンされ人通りもまばらなジャララバード市内

【特集】コロナ禍のアフガニスタン

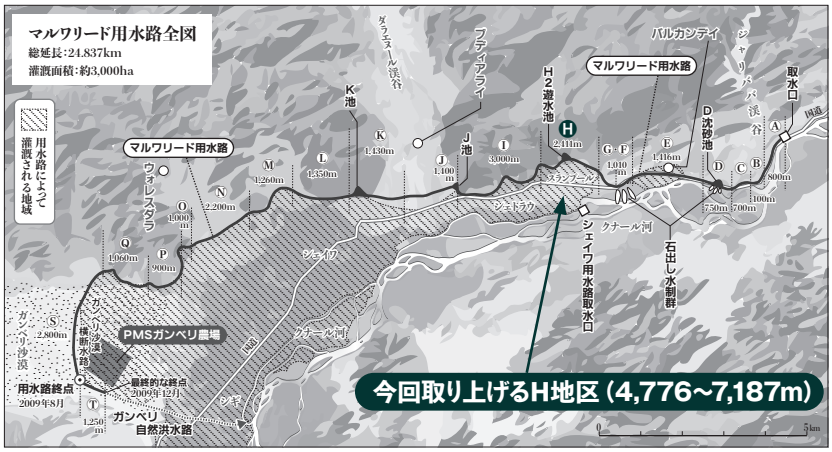
↑ダラエヌール診療所の外来患者の待合室でコロナウイルス感染予防のため、手洗いなど衛生指導をする医療スタッフ（2020年5月5日）
→コロナウイルス感染リスクの高い中、診療所は通常通り24時間体制で診療活動を続行している（2020年5月5日）

マルワリード用水路Ｅ地区―洪水通過橋の拡幅工事。日中は35度を超える暑さの中、コロナウイルス感染対策のため、マスクを着用しながらの作業となっている。ジャララバード事務所からはソーシャルディスタンスを保つように指示が出ている（2020年6月15日）

◎カラー連載

マルワリード用水路を行く⑥

H地区



地図は『天、共に在り』（中村哲著／NHK出版）より転載し追記しています

通水後14 年のスランプール平野。 緑が活気づき、生活の営みが見てとれる（2019年7月3日）

干ばつで荒廃したスランプール平野。かつての村は一軒だけ家を残し、土漠と化していた（2003年12月16日）

建設直後のマルワリード用水路と中村医師。水が来ると聞きつけて、送水前から住民たちが田畑を耕し待っていた（2005年8月10日）

マルワリード用水路H2緩衝池。長さ180m、幅30~80m。写真右側には渓谷からの土石流を緩流化させるため、ユーカリの植林を施している（2009年4月23日）

2度の鉄砲水が流下した同池。マルワリード用水路には至る所にこのような大きな池が造られ、集中豪雨から里を護っている（2018年10月14日）

H地区用水路の住民による浚渫作業。用水路維持保全の継続は建設以上の労力を要する。浚渫された泥土は貴重品で、有機質を多量に含む。近傍に置けば、住民が喜んで持ち帰り、田畑に入れる（2012年9月9日）

マルワリード用水路横の国道を移動する遊牧民（2010年4月27日）

ガンベリ記念公園に建設中のドクターサーブ・ナカムラ記念塔。高さ約15m。塔には中村医師の写真が据えられる予定
（2020年6月10日）

中村哲医師 、バラの咲き誇るガンベリ記念公園にて（2016年4月17日）

況下でPMS職員は一生懸命、誠意をもって働いています。職員のうち一九名がCOVID−19に感染しましたが、神のご加護により全員回復し、現在は仕事に復帰しています。

小麦と蜂蜜の配給

このような苦しい経済状況と私たちの健康状態を考慮し、今年PMSガンベリ農場で収穫した小麦と蜂蜜を職員に配給することになりました。職員一〇一名全員にそれぞれ小麦五一八キロと蜂蜜二・五キロを配り、（中村先生と一緒に）亡くなったザイヌッラー運転手の遺族にも届けられました。現在のような困難な時期にある私たちを助けて下さるペシャワール会に対し、PMS職員を代表して心より御礼申し上げます。

PMSの新たな指導陣そして寛大なる支援者の皆様に対し、私たちは「ドクターサーブ中村学校」の卒業生として今後も全力を尽くしてドクターサーブのやり方を、お考えを踏襲し、先生の望んでおられた事業を遂行することを、あらためてここに誓います。日本の皆様のご支援に深く感謝を申し上げます。

◎現地スタッフからの便り

ドクターサーブ中村の意志を継いで生きていきます

PMS職員／灌漑事業アドバイザー
ハッジ デラワルハーン

「緑の革命」が起きるまで

私はPMS職員のデラワル ハーンです。イスラム暦一三五八年（西暦一九七九年）に政府職を辞し、イスラム党派のムジャヒディン政党に参加しました。その後難民としてパキスタンに移住しましたが、ムジャヒディン政権樹立（ラバニ政権）の際に内務省の将軍（ゼネラル）に任命され、その次のタリバン政権「アフガニスタン イスラム首長国」が陥落するまで、その任務についていました。その後のカルザイ政権では、ナンガラハル州の灌漑局局長に迎えられました。

マルワリード取水口と用水路の鍬（くわ）入れ式の時（二〇〇三年）、私はドクターサーブ中村から招待されました。

それまで私は彼と面識がありませんでした。現場の式典会場に行くと、ドクター中村は地域の長老たちと共に私を待っていました。お互いに自己紹介をしましたが、彼は日雇い労働者たちと同じように作業服を着ていました。共に礎石を据えた後、ドクターサーブ中村はそれは嬉しそうに着工式を開始されました。私はこの時、ドクター中村は本当にこの仕事に特別な愛情を持っていらっしゃるのだと感じました。

着工式が終わった後、私はドクターサーブ中村が灌漑事業を開始する時に正式な手続きを取りたいのだと理解しましたので、式典から戻って政府関係の法的手続きを済ま

2021年カレンダー

「人・水・命」（仮題）

制作・ペシャワール会／PMS

A3判カラー

写真＋中村哲医師の言葉13点（表紙込）

予価1500円（税・送料込）

２年ぶりにカレンダーを制作します。アフガニスタンPMS活動地の写真13枚に、中村医師の珠玉の言葉を添えております。ぜひお買い求め下さい（ご友人・知人へのプレゼント発送も承ります）。

※予約は同封の申し込み用紙で（代金は後払い。払込用紙を同封します）。

ジャララバード事務所で協議をするデラワルハーン氏（左）

せ、それを以って正式なプロジェクトの開始としました。また、ドクターサーブ中村に、今後はナンガラハル州知事と密接に連絡をとる必要性と事業の報告を灌漑省に提出する法律上の義務があることを伝えました。

当時このプロジェクトは、河川から安定した取水量を畑に引く灌漑事業としてはアフガニスタンで初めての事業でした。最初に灌漑省に提出された報告書には見積書や設計図が含まれていなかったため、当局は、報告書としては不十分である、これでは単なる「空想上のプロジェクト」だとはねつけました。

私はドクターサーブ中村が抱いている貧しいアフガン人への深い愛情、自らの事はかえりみず地域住民のために役立つ事業を進めようとなさっている熱意を十分理解していました。しかし当局は納得せず、私は何度も首都カブールまで足を運び、この事業の重要性とドクターサーブ中村の持つ知識、能力、実践力及び管理能力について説明しました。

また、この事業は我々アフガン人に何よりも有益な事業であること、工事はきっと成功裏に完了すること、それがどれほどの費用対効果をもたらすかを説き、当局を説得しました。そうしてようやく灌漑省は本事業に関心を持ち、ドクター中村を首都カブールに招聘することになりました。

この経緯をドクターサーブに話したところ、彼は「私がカブールに行きたくないと言ったら、あなたは灌漑局長をクビになるのでしょうか」と冗談を言いました。その後、灌漑省の指示に応じて二人でカブールに行きました。数回の会議の後、当局からの認可がおりるとドクターサーブ中村はとても嬉しそうにされ、やっと安心したと私に感謝をしてくれました。

そしてようやく神の御慈悲により事業は無事完了し、ガンベリ沙漠の何千ジェリブ（注：単位面積一ヘクタール＝五ジェリブ）にも及ぶ開墾地や未開墾地にまで水が到達するようになったのです。このようにして「緑の革命」が起きて、水路が土地を潤し、周辺地域に住む何千世帯もの人々に命を授けたのです。

この後、シェイワ、シギ、カシマバード、カマ、カシコート、ベスード、ミラーンの取水口や護岸そしてマルワリードⅡ堰工事へとプロジェクトが次々と繋がって行き、ナンガラハル州の景色を変えて行ったのです。

大人は家族を養い、子供たちは学ぶ

ある時、ドクターサーブ中村は私にアフガン人を幸せにするものは何だろう、と尋ねられました。私はモスクとイスラムを学べる学校でしょうと答えました。するとドクターは質実かつ現地の慣習に沿ったモスクとイスラム宗教学校（マドラサ）を建設しました。ドクター中村は皆の顔に笑顔を、人々に平和をもたらしたいと考えていたのです。ドクターサーブは、大人は安心して家族を養い、子供たちが学べることを望み、戦争を憎んでいたのです。彼は真の英雄です。

ナンガラハル州のシェルザイ知事はドクターサーブを自分の肩に担ぎ、カカ・ムラー（注：「ナカムラおじさん」カカ＝おじさんの意）の名を授けました。ドクター中村はお返しに知事を自分の肩に担ごうとしましたが、これは皆が止めました。

またある時、ドクターサーブはガンベリ沙漠の地図に図面を引き、樹林帯を造る計画を立て、「これでシギの住民と彼らの畑を砂の害から守りたい」と言いました。私たちは一体そんなことがガンベリ沙漠で本当に

出来るのかと半信半疑でしたが、ドクターサーブは必死の努力を続け、やがてこの灼けつく沙漠を緑の大地に変え、米や麦、野菜類を栽培する農園や果樹園を拓き、更に多くの人が憩えるようにと庭園まで造りました。今ではここにアフガン全域から人々がピクニックにやって来ています。

私たちは決して忘れない

イスラム暦一三九一年（西暦二〇一二年）に、私はもう政府の仕事は続けたくないと思うようになっていました。そしてドクターサーブ中村とドクターサーブ ジアのご好意で、ＰＭＳのアドバイザーとして雇用して頂くことになりました。ＰＭＳのような組織で働けることは私にとって大きな栄誉です。

一年前、私はガンベリ農場や公園の整備、調整のためガンベリ公園に配属されました。今日までここで勤務してきましたが、ドクター中村には寛大な心と愛を以って迎えて頂きました。ドクターサーブ テツ中村は心優しい現場主義者であり、約束は必ず守る聡明な人でした。また自分の仕事を心から愛し、肉体労働も全く厭わない人でした。ある時はイード（祭日）を間近に控えた重要な時期に合わせて工事を完成させ、水路への通水を実現し地域の人びとを大いに喜ばせました。のちにアフガニスタンの名誉市民証を授与された時の先生は本当に幸せそうでした。

治安情勢が良くない時、私がドクターサーブ中村にその旨を伝えたところ、現場を避け机上の仕事をするなど、どこにいても忙しく働いておられました。そんな時、ドクターサーブ中村は私に言われました。「人間、誰しもいずれ最後は死ぬものです」と。確かにそうですが、ドクターサーブ中村のような亡くなり方は誰も迎えるべき運命ではありません。

アフガニスタンでは皆がドクターサーブ中村の死を心から悼んでいます。殊に先生のもとで働いていた職員や、先生と間近に接して来た者たちは、自らもアフガン人のように皆と喜びと悲しみを共にして来たドクターサーブ中村を失って悲しみに打ちひしがれています。先生のご家族、ＰＭＳジャパン（ペシャワール会）事務局の皆様には心からのお悔やみを申し上げます。

ドクターサーブ中村のことが皆の心から忘れ去られることは決してありません。先生は真の英雄であり、私たちはこれからの人生を先生のご意志を継いで生きて参ります。

感謝の気持ちを込めて。

忘れがたい思い出
――空爆下の食糧配給

元ＰＭＳ職員／用水路建設担当
グラム サヒ

カブール住民一万世帯に食糧を

私はＰＭＳのアフガニスタン人、日本人の同僚と共に人道援助の仕事に携わりました。この時のことは私にとって心温まる、忘れがたい思い出です。そこで私の筆は拙く無力ですが、その時のことを書きたいと思います。

これまでに日本の方々から何百回と人道援助を頂いてきましたが、そのひとつに、首都カブールや各地で米軍が昼夜を問わずに空爆を行なった、これまでで最も危険で恐ろしかったこの時期に実施した食糧配給（二〇〇一年十月開始）があります。当時カブールに繋がる道路は全て封鎖され、カブールの住民は年寄りも若者も不安に直面していました。アフガニスタンを襲った干ばつで

中村医師とグラム サヒ氏

食糧が不足し、たとえお金があっても食べ物が手に入らない状態に陥っていたのです。

このような、作物を育てたくても水不足で不可能、動き回ることも危険でままならない状況の中、「人の道を知る真の人の子」である日本人のドクターサーブ中村が日本のＰＭＳ本部（ペシャワール会）に相談し、理事会にカブール住民への支援をお願いして下さったのです。

慈愛深きＰＭＳ本部は会員の方々や日本の国民にこの窮状を説明し、カブール住民一万世帯に食糧を提供して下さったのです。

どこの国が援助を？

私たちはドクターサーブ中村の指示に従い、四つのグループをつくり、カブールを四区画に分けて各区画へ入って行きました。計画に従い、まず一日目は調査をして各世帯に配給カードを手渡し、次に指定の場所で配給カードと引き換えに小麦粉二〇〇kg、植物油一六kgを配給。最終日には各グループが活動をまとめた報告書をＰＭＳの臨時オフィスに提出しました。それが終わると、翌日の夜にドクタージアから別の地域での食糧配給計画の指示がある、という流れでした。

このようにして私たちはタリバン政権が陥落するまでカブール各地で食糧配給作業を続けました。陥落前夜には各地で車が焼かれたり死体が折り重なったりしていました。本部の指示により配給作業を中止し、ジャララバードに移動しました。

陥落前夜の光景は辛くて嫌な記憶ですが、それ以外は、カブールのあちこちで市民が私たちの活動を喜んでくれて、「あなた達は誰なのですか。どこの国が私たちに援助をしてくれているのですか」と聞かれた時に「これは心ある日本の方達からの支援で、ＰＭＳジャパンという支援団体とそのスタッフの皆さんが準備してくれたものですよ」と答えたことなど、忘れがたい嬉しい思い出ばかりです。

ありがとうございます。

†中村哲医師を偲んで

日常の平和の大切さを行動で示された中村先生

元福岡徳洲会病院長／ペシャワール会理事
佐藤耕造

最初から先生を支えようと決めていた

中村哲先生との付き合いは、一九八二年（昭和五七年）、私が当初勤務していた小倉記念病院から福岡徳洲会病院に赴任して以来のことです。

中村先生はすでに私の赴任前、福岡徳洲会病院に籍を置いていました。ペシャワールのミッション病院に赴任することが決まり、岡山の邑久（おく）光明園やイギリス・リヴァプールの熱帯医学校へ研修に出向いたりして、準備を進めておられるころでした。現地に赴任する際、空港まで見送りに行きましたが、そのとき尚子夫人は、まだ小さい健さんを抱っこしていました。

中村先生は私より一〇歳も若いのですが、当時から真面目というか、言葉遣いが丁寧で、患者さんとの応対もまた丁寧でした。現地では、ピンセットなどの基本的な医療用具すら不足しているという話でしたから、まだ使えるものをかき集めて寄付したり、中古の脳波計を探して現地に送ったり、活動費をバックアップしたり、ということもありました。

また、私は脳外科が専門、片や中村先生は神経内科ご出身だったものですから、最初のころは先生が帰国したタイミングにあわせ、ハンセン病の患者さんのための気管切開のやり方などを教えたこともありました。近年は、中村先生が帰国する機会を見計らって、先生の健康診断をしていました。

確か一九九二年のことでしたが、中村先

生から「一度来ませんか」と誘いを受け、宇治徳洲会病院の板垣徹也医師と共に現地を訪問しました。すでに藤田看護師（現ＰＭＳ支援室長）も働いていました。ペシャワールの難民キャンプに連れて行ってもらったり、資金を工面してミッション病院にハンセン病男性病棟を建設したのも懐かしい思い出です。その後、中村先生は最初の派遣母体を離れて、経済的にも苦境に立たされたこともありましたが、私は先生を支えようと決めていました。

用水路まで作るとは夢にも思わず…

現地活動はその後、向こうの政情やニーズにあわせてどんどん変化していきます。ある時期は山岳無医村の巡回診療をしながらハンセン病の患者さんを早期発見・治療しに行くというので、日本からジープを送ったこともありました。二〇〇〇年代に入ると、今度は干ばつが進むアフガニスタンでの水源確保事業が始まりました。中村先生は、干ばつによる飢餓状態で運ばれてきた子どもが母親の腕の中で冷たくなっていくということを実際に体験し、大きな衝撃を受けたと思います。しかし先生はあくまで医者ですから、本当に用水路を作って農地を復活させるなどということは、夢にも思いませんでした。ＯＤＡなどの政府レベルの組織がやるならまだしも、医者が率先して重機を操縦するのですから…。

二度目の現地訪問は二〇一〇年。「緑の大地計画」が進み、村が甦ったシェイワ地区に完成したモスクとマドラサの譲渡式が開かれたときでした。緑が復活した現地を実際に見ると、やはり感動しました。青空教室で学ぶ子どもたちも印象的でした。

卑近なたとえですが、私は全国に開設した（徳洲会の）新病院のマネージメントに携わった経験もあり、病院というのはただ建物を作るだけではなく、やはりトップの考え方や理念が大切だと思います。祖父玉井金五郎氏などからの影響もあったようですが、中村先生はいつも、家族が共に暮らせて三度の飯が食えるという、ごく日常の平和の大切さを強調しておられました。医者は病気を治すだけではなく、本当の意味で人を生かすことが大切だ、とも。先生は、現地の長老会に粘り強くかけ合い、地元の人々を巻き込みながら、一緒に蛇籠（じゃかご）を作ったり、植林をするという活動を通して、実際に豊かな実りを得るという喜びを、目に見える形で実践し、現地と日本の人々に示されたと思います。

中村哲医師の著作等

アフガン・緑の大地計画
伝統に学ぶ灌漑工法と甦る農業【改訂版】
Peace (Japan) Medical Services & ペシャワール会
B5判並製・256頁・オールカラー　1700円（税込）

以下はすべて本体価格（税別）です

医者、用水路を拓く 1800円
ダラエ・ヌールへの道 2000円
ペシャワールにて 1800円
辺境で診る 辺境から見る 1800円
医者 井戸を掘る 1800円
医は国境を越えて 2000円
石風社 福岡市中央区渡辺通2-3-24 電話092(714)4838

人は愛するに足り、真心は信ずるに足る アフガンとの約束
中村哲／澤地久枝（聞き手）　2100円
岩波書店 東京都千代田区一ツ橋2-5-5 電話03(5210)4000

天、共に在り アフガニスタン三十年の闘い
中村哲　1600円
NHK出版 東京都渋谷区宇田川町41-1 電話03(3464)7311

復刊されました
医者よ、信念はいらない まず命を救え!
中村哲　1800円　羊土社

アフガニスタンの診療所から
中村哲　740円　ちくま文庫

アフガニスタン
用水路が運ぶ恵みと平和
朗読　吉永小百合　DVD
2700円 ペシャワール会製作

▼未使用の切手、書き損じハガキ（官製ハガキ・年賀ハガキ）をお送り下さい

＊引き出しの中などに眠っているものをお送りいただければ幸いです。会報発送等に使わせていただき大変助かっております。なお、外国の切手は取り扱っておりません。

▼寄付をしてくださる皆さまへ

＊当会は法人格を持たない「任意団体」です。お送り下さったご寄付については税金控除の対象となりません。予めご了承頂きますよう、お願い致します。

▼現地活動を紹介するパンフレットをお送りします

＊ペシャワール会の活動をご紹介されるときにお使いいただけるものです（払込用紙がついています）。ご希望の方は遠慮なく事務局にお申し越し下さい。パンフレットはＡ３変形を四折りしたもので、長形の定形封筒に入るカラー版です。なお、パンフレット、会報等は受け取る意思のある方への配布を原則としております。（ポスティング等は御遠慮下さい）

朝倉市とアフガニスタンの懸け橋・中村哲医師（下）

山田堰土地改良区前理事長／ペシャワール会理事
徳永哲也

取水堰への探究心

マルワリード用水路は岩山に沿った高台に掘削されており、どこでも最高のロケーションが望める場所で、用水路沿いには柳・ユーカリ・桑が植栽され、まさに自然と調和した景観が平和と心豊かな雰囲気をつくっています。

二〇一九年四月のアフガン訪問時に流域の河川状況を毎日観察できたのですが、自然を敬愛しながら「緑の大地計画」が作成されたことを実感できました。「緑の大地計画」の成功は、自然と同居する思想を根底に策定されたことによると確信しました。

一七九〇年に築造された山田堰も、一九九八年の練り石に全面改修されるまでは、堰堤損傷によりたびたび大・中・小の補修工事がなされ、今日の山田堰になったと推測されます。現地の取水堰も、毎年発生する洪水により補修工事が行われています。

二〇一五年夏、中村先生が山田堰左岸に三日間通われたことを後日知りました。

山田堰は増水すると三本の流れが川の中央で激突し、お互いの流速を減速する微妙な石張堰となっています。中村先生はアフガニスタンの取水堰改修について思考するため、山田堰の構造・流水の状況を観察されていたものと思われます。

二〇一九年二月の改修工事によって完成したカマ第一堰の取水口に立ち、堰を眺めると、増水したクナール河の取水堰の瀬の流れ、洪水吐き水流と土砂吐き水流が川の中央で合流し、お互いの水勢を打消す構造となっていました。その姿は、増水時の山田堰と酷似しており、アフガニスタンに「もう一つの山田堰」が築造された実感がわき、目頭が熱くなったことが忘れられません。

カマ堰流域は流量・流速があるため、諸外国が取水堰を建設するも全て失敗した困難な河川区域でした。中村先生はクナール河の特性を貪欲なまでに探求、カマ堰開通から七年後の二〇一八年十月から全面改修、二〇一九年二月、クナール河に「傾斜堰床式石積み堰」の中村方式（PMS方式）の取水堰が見事完成したのです。

山田堰を左岸から観察すると、南舟通しと中舟通しとの堰縁の石積みが、こんもり盛り上がっています。これは「流体浮力」の原理が施されていることが判明、この構造は下流堰堤の衝撃を和らげる効果があるとのこと、まさに飛行機の翼のような形状になっています。是非皆さんにもご覧になって頂きたいと思います。

命の水をありがとう

昨年十二月四日に中村先生が銃撃により亡くなられたことは、ペシャワール会・PMSにとって衝撃であり断腸の思いです。村上会長がいち早く、ペシャワール会は、中村医師の意志を継ぐべく従来どおり支援を行うと力強く表明されました。

私も微力ながら、中村先生の志を受け継ぐ活動に尽力したいと考えています。

中村先生のご冥福を心からお祈りします。

＊

堀川用水路沿いにある大福小学校では、昨年十二月五日、中村先生を偲ぶ全校集会が開催されました。平成二三年・二四年に作られた歌詞に、今年二月、中村先生を偲んで三番が作られました。皆様に紹介します。

命の水をありがとう

作曲　大福小学校　平成二三年度四年生

1. 古賀百工さんを　知っていますか
この朝倉を　米どころにしてくれた
たくさんの知恵と　たくさんの努力で
山田堰と堀川を　みんなでつくり
命の水を　ありがとう
今は世界の　山田堰
郷土の誇り　ありがとう

これから　僕たち　私たち
大事に守って　いきましょう

作詞　平成二三年度四年生

2.
古賀百工さんの　思いと同じ
みんなの暮らし　豊かにしたいと考えた
山田堰の知恵を　アフガンに生かし
砂漠の大地を　緑に変えた
命の水を　ありがとう
これから　僕たち　私たち
世界に広めて　いきましょう

作詞　平成二四年度四年生

3.
中村哲さんを　知っていますか
苦しむ人たちを　見捨てず命をかけた
医師
診療所や医者よりも　一本の用水路
アフガンの子どもの　笑顔を守る
命の水をつくり出し
今もあなたの　その願い
大事な命　守ること
これから　僕たち　私たち
思いや活動　受け継ごう

作詞　令和元年度四年生

【中村哲医師講演】

沙漠を緑に　川崎市での講演から②

二〇一九年九月九日、川崎市総合福祉センターホール
主催：かわさき国際交流民間団体協議会／川崎市国際交流協会

山岳地帯に診療所を

私が赴任する数年前に、アフガニスタンがひどい戦乱に襲われます。一九七九年、当時世界最強の陸軍と言われたソ連軍の精鋭部隊九万人が大挙してアフガニスタンに侵攻するという事態が起こりました。その後なんと九年間、アフガニスタンは内乱の巷（ちまた）におかれました。一部の報告によりますと二〇〇万の人々が死亡しました。さらに六〇〇万の人々が難民となってイラン、パキスタンなどの国外に逃れるという事態になりました。私たちは医療の立場から、このアフガン問題に関わっていったのであります。

初めはほそぼそと、難民キャンプで治療をしておりましたけれども、ここで私たちは方針の大転換をいたしました。というのは、当時農村には医療設備と言われるものはなかった。ほとんどの患者はアフガニスタンの山の中からやってくる人々でありまして、ハンセン病だけではなくて、他の感染症、伝染病ですね、それが多かった。腸チフス、結核、マラリア、デング熱……ありとあらゆる感染症の患者さんがいました。感染症の巣窟（そうくつ）といっても言い過ぎではなかったのです。

そういうところで、ハンセン病だけを診る診療所は絶対に成り立たない。一つには、ハンセン病に対する治療もあまりない代わりに偏見も少ないところで、ハンセン病とばかり言いますと、ハンセン病って何ですかということになって、かえって差別を作り出しかねません。こういう状態を憂慮しまして、方針を立てました。アフガニスタンの山岳地帯にはいろんな伝染病があり、ハンセン病の患者も多い。ソ連撤退後の内戦が下火になった暁（あかつき）にはそういうところにできるだけ多く診療所を出して、農村の診療モデルを作る。そしてハンセン病も特別扱いせず、いろんな感染症の一つとして診ていくという方針を立てて、人々との付き合いを始めていったわけであります。

これ（写真1）はアフガニスタンでは最も高いところに住んでいる民族の居住地の一つで、標高が三千メートル以上、当時ペシャワールから、歩いたりジープに乗ったりして一週間かかります。驚いたことに、これが今も変わらないアフガニスタンの農村地帯、山岳地帯の姿であります。

アフガニスタンについてみなさんがご覧

写真1　アフガニスタンの山岳無医地区の一つ、ヌーリスタン山村

になる映像は、アフガニスタンの例外ともいえる首都カブールのものがほとんどです。アフガニスタンというと戦争の取材が多いですから、出てくる場面というのは、爆破事件の現場であったり、戦争の場面であったり、そんなものばかりです。でも、人々は、場所にもよりますが、何百年も昔と変わらない生活を送っているという地域が、山の中にはたくさんあるのです。当時、内戦が激しかったので、私たちは山越えをして人々と付き合いを深めていきました。ソ連軍が撤退した後を追うようにして次々と診療所を建てていきました。

世紀の大干ばつ

さあ、これからという時に、アフガニスタンを襲ったのが世紀の大干ばつです。忘れもしない、西暦二〇〇〇年、診療所の周りから村が消え始めていったのであります。村が消えるというのはどういうことなのか、過疎化だとかそういう話を聞きますけれども、そんなものではない。つい半年前、一年前まで緑豊かであった一つの村落が、文字通り、物理的に消滅するわけです。ほんとに、ごく最近まで、この辺はたしか村だったがなぁというところが、一木一草も生えない沙漠になってしまった。これがアフガニスタン全土で起こり始めたのです。

人々は自分たちの村を捨てて難民化していきました。農業で生計を立てる、しかも自給自足で暮らしているところで水がないということは何を意味するか。飲み水がないというだけではない。作物がとれない、食べ物がない、生活ができない。そのために次々と家族が栄養失調で倒れ、餓死するという事態です。食＝仕事を求めて家族を引き連れて、村ごと難民化していく。これが、診療所の周りで起き始めました。

二〇〇〇年の五月になりまして、WHO（世界保健機関）が発表した数字は鬼気迫るものでした。「現在進行中の中央アジアの大干ばつは、おそらく人類が体験したことがないような規模で拡大していく。その中で最も激烈な被災を受けつつあるのがアフガニスタンで、国民の半分に相当する一二〇〇万人が被災して、飢餓線上が四〇〇万、三度三度ご飯が食べられないのが四〇〇万、さらに餓死線上、ほおっておくともうすぐ死にますよという人が一〇〇万人」という警告を出しました。けれども、ついにこの大事な時に国際救援は現れなかったのであります。

ここ（写真2）は、もともとは豊かな村だったのですが、これがほんとに消滅、物理的に消滅していったのです。当時圧倒的に多かったのは、子どもの赤痢、コレラ、腸

写真2　大干ばつの襲来により、緑豊かだった村落は一木一草も生えない土漠へと姿を変えていった

管感染症でした。主な犠牲者は子どもたちでした。子どもですから、よくわからないので、臭いような水まで飲む。そうすると当然下痢だとか、赤痢だとかにかかります。普通、赤痢では子どもを死なすことはありませんけれども、このときは次々と子どもの犠牲者が出ました。食べ物がないので慢性の栄養失調になっていて抵抗力が落ちる。そのために簡単な病気で命を落とす、これが周辺で起きたわけであります。

中には何日も歩いて診療所にやってくる若いお母さんたちもいました。それでも生きてたどり着くのは良いほうで、たどり着いても外来で待っているうちに子どもが冷たくなるという光景も、日常的に見られました。こういう状況を目の当たりにすると、国連機関が出した百万人餓死寸前という警告は、決して誇張された数字ではなかったと思いました。

そのとき思いましたのは、医療というのは非常に無力だということであります。飢えや渇きに対して、いくら薬をつぎ込んでも治らない、おなかの空いた人には十分な食べ物、のどの渇いた人には十分な清潔な飲み水、これさえあればほとんどの人たちは死ななかった。こういうことから、私たちは少しずつ水の問題に巻き込まれていきました。確か二〇〇〇年の六月だったと思いますけれども、診療所の周りの涸れ井戸の再生を始めました。これが、一六〇〇ヵ所で清潔な飲料水を確保し、とにもかくにも後には数十万の人々が村を離れずに暮らせるようになる大きな仕事に発展していきました。（続く）

＊表紙写真によせて＊

タルブザァ（スイカ）とひまわり

まだ空が白んでくるかこないかという時刻に、少年は父親のはずんだ大きな声で飛び起きた。寝ぼけ眼で夢の続きを惜しむ暇もなく、スイカ畑に連れ出される。今日は一族総出でスイカの収穫、出荷の一大イベントだ。一族で村を形成することも珍しくない土地柄、村人総出といっても過言ではない。

2010年、今まで見たこともない大洪水がベラ村の上流のカチャラ村から流入し、6㎞にわたって土地を二分した。高地のコーティ村やタラーン村までも洪水は押し寄せ、川石や砂が大量に畑に積みあがっている。このまま畑を失うと食べて行けない、難民になって隣の国に逃れるかと迷ったが、畑を元に戻そうと大人も子供も総出でかき出し作業を始めた。しかしクナール河に近い方の土地には幾本もの川道が残りたくさんの湿地ができた上に、毎年恐ろしい洪水の通り道となり、次第に荒れ地になっていった。

アッラー・アクバル！ 今年の夏、ベラ村のはずれ、この地でまさかこのような日を迎えようとは誰が想像できただろうか！ トラックの荷台に満載される程のスイカの収穫に、村人たちは皆感無量だ。満開のひまわりも一緒になってお祝いし、この喜ばしい日に文字通り花を添えてくれている。PMSと一緒に日照りの中を働いた村人たちは、自分たちの苦労は一切語らず、口々に神と一人の日本人に感謝を述べる。「ドクターサーブのおかげだ！」「ドクターサーブ中村ありがとう！」

彼らのこの謙虚さ、誠実さこそ中村医師の活動を支えてきた一つの力の源だったのだ。村人たちは皆、太陽に背を向けず真っすぐ正対するひまわりの凛とした立ち姿に、どんな困難にも背を向けず正面切って立ち向かっていった中村医師の姿を重ねずにはいられなかったのかもしれない。

PMSの動き

3月22日　アフガニスタン政府よりコロナウイルス感染症対策が通達、60歳以上の職員は自宅待機

23日　FAOとのゴレーク堰建設についての協議がコロナウイルスの影響で中止

28日　アフガニスタン政府の通達により、PMSはダラエヌール診療所を除き勤務時間が8時～13時までに短縮（3月末、首都カブール封鎖）

4月2日　作業地からジャララバード市内へ通じるベスード橋が突然封鎖

29日　ナンガラハル州政府がPMSの車両4台のベスード橋通行を許可

5月10日～21日　マルワリード用水路ジャリババ渓谷からの洪水通過橋周辺の整備

23日～25日　1ヵ月間の断食を終え、3日間のイード休暇

30日～6月22日　マルワリード用水路E地区洪水通過橋拡幅工事

6月2日　ガンベリ農場にて小麦と蜂蜜の収穫

4日　マルワリードⅡベラ用水路の延長工事を開始

10日　ガンベリ農場で収穫した小麦と蜂蜜をPMS職員へ配給

●事務局だより

＊七月初旬の記録的な豪雨は各地に甚大な被害をもたらしました。被災された皆様に心からのお見舞いを申し上げます。新型コロナウイルスも予断を許さない折、ご健康に留意されますように、そして一日も早い復旧を祈るばかりです。

＊二〇一九年度の現地事業および会計報告をお届けいたしました。昨年十二月以降、新しくご支援くださる方が大幅に増え、感謝いたしております。どうぞ今後とも末永いご支援をお願い申し上げます。

＊一九九六年に北海道の天文家渡辺和郎さんたちが発見し、「１９３１４」の確定番号がついた小惑星に「Nakamuratetsu」の名が冠されました。この星は火星と木星の軌道にあり、直径は推定約六キロ、残念ながら肉眼では見えません（詳細はホームページをご覧ください）。発見者の渡辺さんは「星の名前は未来永劫残る。素晴らしい行いをされた方の名前がつき、発見者冥利に尽きる」と、この命名に尽力された支援団体「ビエラの会」代表の湊典子さんは「中村先生自ら、『一隅を照らす』星になってくださった」と、話しておられます。（西日本新聞六月二八日に拠る）

●ＰＭＳ支援室より

＊今回の会報にやっとグラム サヒ氏の原稿の掲載が叶いました。氏は二〇〇一年十月、厳しい冬を迎えようとしている首都カブールでＰＭＳの食糧配給を実行したお一人です。二〇〇〇年に顕在化した干ばつ被災地のあちこちから、首都に行けば何らかの仕事にありつけるのでは、鉄屑や紙屑など拾えるのでは、と国内避難民が集中していた時期です。ペシャワールのＰＭＳ基地病院とカブールとは配給や職員たちの状況を把握するため毎日連絡を取り合っていました。配給の途中で空爆が始まります。配給作業に行った職員から「夜になると空爆が始まる。建物も揺れ窓がガタガタ音を立てる。恐ろしい…」と胸を締め付けるような連絡。撤収に向けての協議をした時、グラム サヒ氏が「この食糧は食べられないアフガンの人々に配給するようにと、ドクターサーブが日本に戻り、家族と過ごす時間もない位日本中を駆け巡り支援を呼びかけて下さった。君たちは引揚げて良い。私は一人残ってでもこれを配る」と話したところ、皆が残り配給を続けることに決まりました。

　氏にこの時の事を書いて欲しいと長年お願いしていましたが、なかなか書いて頂けませんでした。この度の原稿を読んで、なぜ書きたくなかったか分かった気がしました。中村先生はこの食糧配給について「私一人がやったように言われるが、実際には同胞を想うアフガン人たち自身が頑張ったのです」と講演会でいつも話されました。この事を氏にお伝えし、しつこく原稿依頼をしたことを許して頂きたいと思います。

豊橋の㋝村から

＊無念でなりません。どうして命と一生を捧げたアフガニスタンの地で中村先生を銃撃に奪われなければならなかったのでしょうか。一九九九年に豊橋で最初の講演をして頂き、すぐに支援する会が立ち上がりました。二〇〇二年には豊橋の桜丘中学校で講演会があり、溢れる参加者で座るところが無く、壇上に子どもたちをあげ、先生と一メートルも離れてないところでお話を聞きました。豊橋には何回も来て下さり、お話はいつも命の大切さと国境のない人間の尊厳を伝えてくれました。そして、いつも自分はアフガニスタンではフランス人と思われているんだと、笑いを取っていたのか、本心なのかわかりませんが忘れられない一言です。

　先生！体はなくなってしまいましたが先生はずっと働かなければなりません。多くの人が困ったり、悩んだりした時に先生に問うからです。その度に先生は返事をしなければなりません。安らかにと言いたいところですがそうもいきません。ずっとずっと永遠に私達の先を歩き道しるべを作って下さい。（渡辺のりこ）

会　則

①本会の名称をペシャワール会とする。
②本会は、中村哲医師のパキスタン北西辺境州（現パクトゥンクワ州）ならびにアフガニスタンでの医療活動などを支援し、必要な広報・募金活動とともにワーカーの派遣を行うことを目的とする。
③本会は、思想・信条にとらわれず、「支え合い」の精神で一致して会を運営する。
④会員は年額三、〇〇〇円、学生会員一、〇〇〇円、維持会員一〇、〇〇〇円の年会費を納入する。
⑤会員はそれぞれ可能な範囲で、自ら創意工夫して自由なやり方で支援活動を行う。
⑥本会は会報を発行し、会報を通じて活動を報告する。
⑦本会は若干名の理事、監事を選任し、会の運営を行う。
⑧毎年一回総会を開き、事業および会計について報告する。
⑨本会の事務局を〒八一〇―〇〇〇三　福岡市中央区春吉一―一六―八　ＶＥＧＡ天神南六〇一　℡〇九二―七三一―二三七二内におく。

二〇二〇年の総会、現地報告会は十月三日（土曜日）に開催予定です。

発行所●ペシャワール会　〒810-0003　福岡市中央区春吉1-16-8　ＶＥＧＡ天神南601号
電話　092（731）2372　FAX　092（731）2373　郵便振替　01790−7−6559
発行日　2020年8月5日　No.144　会長／PMS（ピース・ジャパン・メディカルサービス）総院長 村上優